カンディンスキー作《白い縁取りのある絵（モスクワ）》
―抽象絵画成立前夜の空間表現について―

山田由紀（京都大学）

本発表は、ヴァシリー・カンディンスキー（1866-1944）が抽象絵画成立を目前に描いた《白い縁取りのある絵（モスクワ）》（1913 年、グッゲンハイム美術館蔵）について、その空間性に着目して検討する。本作は「ヨハネ黙示録」と画家の故郷ロシアの主題的錯綜を根幹に、両主題に纏わる具象的形態に抽象化が施された、具象と抽象の狭間で揺動する作品として解釈されている。画家は、本作制作に 5 ヶ月と約 19 枚もの下絵を要したが、突如閃いた「白い縁」を描き加えることで完成作に至った。この縁が付加された経緯について、F・テュルレマンなどの先行研究は、本作の構想が下絵の段階で縦長から横長フォーマットへと変更された際、四隅に生じた余白を埋めるためであったと捉える。だが、その後カンディンスキー芸術に頻出する縁を描いた作品群の端緒である本作の縁は、そのような一元的因果律に還元し得ない複雑な要因から生じたのではないか。本発表は、当時画家が直面していた絵画の空間性という問題の中で本作の縁の形成を考察することで、本作が、画家の抽象絵画成立の光明と動的な過渡期の緊張を呈する画期的作品であることを明らかにする。

本発表はまず、芸術家を預言者と見做し、芸術作品の創造と世界の創造を同一視したカンディンスキーの芸術理念が、物質主義から精神主義への時代精神の転換に寄与する新たな絵画空間の模索を促したことを論証する。例えばR・ツィマーマンは、画家がこの時期、ルネサンス以降の線遠近法による三次元空間、及び、近代における二次元平面への回帰をその物質的側面ゆえに批判し、不確定性と浮遊感にて観者を包み込み一体と化すイリュージョン的絵画空間を理想としていたと指摘した。本発表ではこうした先行研究を咀嚼した上で、理想的空間の実現のために本作にてなされた試行錯誤を具体的に検証する。

まずカンディンスキーが行ったのは、一点固定的な線遠近法を批判的に生長させることだった。彼は複数の中心点と線的要素を導入し、構図の把握に際する観者に視線の運動を強いることで、観者と作品の主客混合を図ったのである。加えて、下絵が明示する本作の対角線構図は、画家が運動性と空間的奥行きを追求した所以である。実際、2010 年に本作所蔵美術館にて実施された調査からも、画家が色彩によって地と図の関係を曖昧にし、不確定的空間で観者を浮遊させる効果の生成に苦心したことが分かる。画家は当時色彩において未だ発展途上にあったからこそ「縁」を起用することで、縁内部の要素を奥行きへと押し込みつつ四隅を無効化し、いわば不可避的に空間的後退と浮遊感を生み出したのだった。

画家の抽象絵画の成立は、新たな絵画空間の創出と不可分な関係にある。それゆえ空間性確立の直前期にあたる本作は、抽象へと向かう彼の試行錯誤の集大成であり、後の縁を描いた作品群への展開をも胚胎する転換点であると結論づける。